

解 説

海外留学のススメ

～ 海外留学って、ちょっとかっこいいと思いませんか？ ～

永井 一 清 *

Go Abroad to Develop Your Research for Your Bright Future!

Kazukiyo NAGAI*

子供のときから家族旅行で海外に行くことも普通になりました。修学旅行や交換留学で海外に生徒を派遣する高校も珍しくありません。海外駐在員として家族同伴で赴任することも一般的となりました。お盆や年末年始、ゴールデンウィークなどの連休も全国の国際線ターミナルは賑わっています。ニュースやスポーツも海外とライブ中継が可能となり、リアルタイムで視聴できる時代となりました。海外といつもつながっているのに、なぜ海外留学しなければならないのでしょうか？ はっきり申しまして、日常生活に不都合はないでしょう。「それではなぜ？」と思われたあなた。あなたこそ、できるだけ早めに海外留学した方がよいでしょう！

キーワード：海外留学、研究留学、国費留学、助成金制度、多様性、ウェルビーイング

1. はじめに

「日本包装学会誌の特集号で、海外留学のススメを執筆してください。」というメールが届きました。現在の日本の科学技術系の学術分野は、ドクターコースへの進学者と海外留学者が減少し、研究の国際競争力も低下しています。魅力のない国に、海外から優秀な人材や投資は集まってきません。そのため国を挙げて国際共同研究や海外留学の支援に力を入れています。

それに対して、観光では海外から選ばれる国となりました。人気の観光地は、オーバーツーリズムの状態です。また、学生や若手世代では、バーチャル面での国際化が進んで

います。日常的にSNSで世界とつながり、個人でもリアルタイムで海外の情報を得られるようになりました。学校の授業や質疑もリモートで行えるようになりました。

観光やバカンス、職場の業務でないのに、わざわざ海外に行く必要はないのではないかと・・・と思う人の方が多いことでしょう。このような時代でも学生に海外留学を勧めて実際に送り出している私に、その意義を語ってもらいたいという趣旨でした。

本解説で対象にしている留学スタイルは「研究留学」です。文化交流や授業を受講するためではなく、大学院生や大学院を修了した若手研究者が、海外の大学や研究所で研究

* 明治大学理工学部応用化学科（〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田 1-1-1）、Department of Applied Chemistry, Meiji University, 1-1-1 Higashi-mita, Tama-ku, Kawasaki 214-8571, Japan, Tel: 044-934-7211, E-mail: nagai@meiji.ac.jp

を行うための渡航です。年齢にすると 30 歳前半までの方を念頭においております。

私はアメリカに 3 年、オーストラリアに 2 年住んでいました。また現職についてからは本学海外協定校のあるマレーシアをよく訪問しています。学生の留学先は私が紹介していることもあり、私が安心して学生を送り出せる友達の研究室です。そのため留学先は、アメリカ、オーストラリア、マレーシアに偏っています。「多様性の時代、こういった考え方の人もいるんだ・・・」という程度の軽い感じで読んでいただくのが好ましいと思います。本来解説で用いる「である調」や「筆者」は堅苦しいため避けています。お気軽にご覧ください。

2. なぜ海外留学に行くのですか？

「日本にいては得られないものや、日本にいてはできないことがあるからです」と、私は答えています。私の研究室の設備で行えない実験の方が少ないため、わざわざ海外留学しなくてもよい現実があります。それでは、得られないものやできないこととは何でしょうか？

この原稿を執筆している今は 8 月初旬、パリオリンピックが開催されている時期です。メダルを狙うトップアスリートの多くは、海外に身を置いて練習してきたのではないのでしょうか。メダルを取るために求められるレベルを理解しかつ自分自身のレベルも自覚していたことでしょうか。同じ練習が日本でできたとしても、求めるクオリティが違いすぎたのではないのでしょうか。そもそも一緒に練習したいランク上の人が日本にいなかったのでは

ないのでしょうか。

つまり、日本にいては得られないものや日本にいてはできないことにも「ランク分けされたレベル」があるということです。やはり、スポーツ競技での例えが分かりやすいかもしれません。日本国内では、趣味で楽しんでいるサークル活動のレベル、市や区の競技大会レベル、都道府県の競技大会レベル、全国大会レベル、国際大会レベル、国際大会のメダル受賞レベルと大きくランク分けされると思います。海外留学は、将来国際大会に出場しメダルを取るために行く武者修行のようなものです。

ちょっとハードルを上げすぎた感がありますが、安心してください。スポーツと一括りにしても、ご存じのように競技ごとにアスリートが活躍する年齢層が異なります。本解説で念頭においている研究は、スポーツの世界では比較的高めの年齢で花開く競技にあたります。「研究留学」は、次（4 年後）のオリンピックというより、次の次（8 年後）やさらにその次（12 年後）を見据え、有望なジュニア選手を中長期的に育成するようなイメージです。すぐに目に見えてわかる成果を求めているわけではなく、将来に向けてモチベーションを上げさせ、年齢層にあわせた成長を支援するものです。

また、私が紹介する留学先は、そのときに日本人がいない研究室を勧めています。日常生活でも日本の常識が通用しないところに身をおくということです。日本語を話せる人もいません。欧米で名前の通った大学では、学生の半分ほどが留学生です。日本でも多様性の大切さが謳われるようになってきました。

生活・教育環境が異なる国の人たちの集まりでは、物事の見方もバラエティに富んでいます。そして何よりも、留学生の意識の高さは別格なため、良い刺激になることでしょう。

3. ところで「生田」ってどこにあるかご存じですか？

私の研究室のあるキャンパスは、神奈川県川崎市にあります。最寄り駅は、小田急線の「生田」です。新宿まで 30 分弱で行ける便利さから最近では住宅地として発展してきている町です。

海外から観光旅行で東京に来られると、新宿、渋谷、銀座、丸の内、浅草、秋葉原・・・など定番の場所を巡ることでしょう。SNS で話題になっている飲食店にピンポイントで行く人も現れています。しかし「生田」には、観光客は来ません。

私が紹介している留学先も同じような場所にあります。私の研究室の大学院生の、国費留学の例を右表にまとめます。大学や研究所は都心や観光地ではなく、「生田」のような場所にあります。また、住まいはホテルではなく、学生寮やシェアハウスです。地元の人や学生が暮らしている地域で生活します。

さてここで、これまでに新生活を始めたときのことを思い出してみてください。中学校に入学、高校に入学、大学に入学、会社に入社・・・などです。最初の 1 週間は緊張の連続だったのではないのでしょうか。当事者であるあなただけでなく受入側の方々も同じであったと思います。

日本の大学の始まりは 4 月です。ゴールデンウィークを経て、肩の力が抜けてきて「いつも通りの日常」と感じるようになるのは、

表 明治大学永井一清研究室大学院生の国費留学例（2012 年から現在まで）

留学先（国名）	留学者数
テキサス大学 オースチン校（アメリカ）	5
ニューヨーク州立大学 バッファロー校（アメリカ）	3
メルボルン大学 （オーストラリア）	3
ノースカロライナ州立大学 （アメリカ）	2
アーカンソー大学 （アメリカ）	2
豪州連邦科学産業研究機構 CSIRO（オーストラリア）	1
合計	16

おそらく 6 月くらいではないでしょうか。海外留学でも 3 か月くらいすれば「いつも通りの日常」になると思います。

ここからが海外留学の本当の価値がでてくる時期であると、学生に説明しています。なぜなら「いつも通りの日常」になると周りを見る余裕が生まれてくるからです。ちょっと固い言葉でいうと俯瞰的・鳥瞰的に周りを眺め、自分自身の実力も客観的に判断できる時間が生まれるということです。

留学期間は「1 年間」を勧めています。学年暦や会計年度が異なっても、どの国でも 1 年単位で社会が動いていることがあります。現地での生活を 1 サイクル経験すると、何となくでも慣習や文化、社会システムの類似点と相違点も感じ取ることができるでしょう。「研究留学」といっても研究内容だけで

なく、日本国内の常識とは異なる様々な価値観があることを知ることは大切だからです。

4. 費用はどう工面すればよいのですか？

「海外留学の重要性はよくわかりました。しかし海外留学にはお金がかかりますが、どう工面したらよいのですか？」という質問もよく受けます。私の回答は分かりやすく、「意欲のある若者には、国や財団、都道府県が資金援助する制度が多々ありますので活用すればよいです」と答えています。

ドクターコースの学生とドクター取得直後の若手研究者向けには、日本学術振興会特別研究員制度が有名です。その他にもドクターコースと共にマスターコースの学生を対象とした制度も数多くあります。冒頭の「はじめに」で述べましたように海外留学を推進しているからです。各大学には国際交流の事務室がありますので、問い合わせてみるとよいでしょう。だいたいの制度は他の制度との併用を認めていますので、助成額を合算すると自己負担なしで渡航することも可能となります。海外留学の助成制度は元々応募者が少なく採択率が高いため、積極的に応募してみることを勧めています。

私の研究室の学生がよく利用している公募は、「トビタテ！」制度です。正式名称は、「官民協働海外留学支援制度 ～トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラム～」です。大学生・大学院生と高校生を対象としています。例えば、大学院生がアメリカに留学する場合、2023 年度(第 15 期)派遣留学生に対しては、奨学金月額 16 万円、留学準備金(往復渡航費やビザ取得費用など) 25 万円

が支給されます。給費制度ですので、返済する必要はありません。

また各大学で様々な留学支援制度が設けられています。例えば本学では、マスターコースの学生を対象とした「理工学研究科海外研究助成制度」があります。同制度の 2024 年度春募集では、1 か月以上 1 年未満の研究留学を対象に、往復航空券 30 万円、宿泊費および滞在費 48 万円を上限として支給しています。「大学院生海外研究プログラム」という制度もあります。これは 1～2 週間程度の短期間の現地滞在を念頭においたものです。2024 年度学内公募では、渡航費・滞在費で 50 万円を支給上限としています。いずれも給費制度ですので返済する必要はありません。後者のプログラムを「お試し留学」と位置付けて、私の研究室では、本学海外協定校のマレーシア工科大学に行く学生が多いです。

ここで注意点があります。国や財団、都道府県が資金援助してくれる公募に応募するためには、少なくとも 1 年前には海外留学する意思を固めておく必要があるということです。助成団体での審査期間や採択後の事務手続き、先方の大学から受け入れの正式な承諾を得てビザを取得するなどの渡航の準備期間があるためです。

5. 公募の対象者はどのような人ですか？

公募に応募するためには申請書を作成しなければなりません。募集要項が必ずあり、対象者が明記されています。例えば、「トビタテ！」制度の募集要項には、「求める人物像」が明記されています。下記に抜粋して引用します。

「求める人物像」より抜粋

日本の未来を創る将来のグローバルリーダーとして、留学を通じて以下に掲げる素養を身につけようという意欲を有する人材

- ・世界の人々との交流を通じた経験から学び、多様な価値観を柔軟に取り入れようとする態度

- ・世界のグローバルリーダーと対等に渡り合い、国境を越えて活躍し、日本・世界に貢献したいという高い志

- ・様々なことに好奇心、探究心を有し、未知の領域に対しても果敢に挑戦する姿勢

- ・失敗から試行錯誤しながらも挑戦し続ける強い精神力

- ・独自の視点や考えを有し、自らの志を先例に捉われずに具体化するための思考力と行動力

- ・集団活動においてイニシアチブをとり、対話・協働しながら、周囲を巻き込む能力

- ・専門性を有しながら、既存の分野・領域に捉われず広い視野を持ち、社会課題の解決に取り組む能力

官民協働海外留学支援制度 ～トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラム～2023 年度(第 15 期)派遣留学生募集要項より引用

そうです！ 対象者は、「今、できていない人」です。今できていなくても何も問題はないということです。海外留学を通して将来このような人になりたいという夢と希望を抱いている若者に対し、国として投資しようということです。まさしく、先に例えたジュニア選手の育成ではないでしょうか。

かつて国を背負って渡航していた時代がありました。明治維新に各藩から将来有望な若者が集められ、日本の近代化のために西洋に派遣されました。本学の創立者 3 名は、憲法を学ぶためにフランスに派遣されました。ご存じのように日本はドイツ憲法を基とすることを決定しました。採択されなかったフランス憲法を学んできたまだ 20 歳代の若者たちは、1881 年（明治 14 年）に明治法律学校を立ち上げ、自分たちが学んできた西洋の学

問を教えながら近代教育の重要性を説きました。日本で 100 年以上続く私立大学は似たような創立の背景を持っており、そこに各私立大学の「建学の精神」が込められています。会社の創業に通じるものがあるのではないのでしょうか。

昔のように国を背負う必要はありません。スポーツなどでもトップアスリートがプレッシャーで押しつぶされてしまったこともあります。そして私立大学の創立の例のように、残念ながら選ばれなかったときには、自分たちが学んできたことを生かしていこうとポジティブに活動することもあります。

時代も大きく変わりました。肩に力が入りすぎるのも好ましくありませんし、日常的に世界とつながっていますので、もっと軽い感じで考えてもよいと思います。

私は学生に、とりあえずとかひとまずとか渡航する気になってもらうために、「海外留学って、ちょっとカッコいいじゃん。家族や友達に自慢できるよ。就活にも有利だよ！」と、思いっきりハードルを下げて話しかけています。

大学院生は自由度が高く助成金制度も多いため、海外留学しやすいです。一方、会社の若手社員は事情が異なることでしょう。日常の業務におわれ、他のことを考える余裕がないかもしれません。また、与えられた業務以外のことを上司に提案するのには勇気がいると思いますので、ここからちょっと加勢したいと思います。

6. 会社の管理職の方々へのお願い

読者の中には会社の管理職の方もいらっしゃるでしょう。その方々に向けて「海外

留学の価値」を少し語らせていただきます。

会社では、売り上げに直結するかどうか 중요합니다。売り上げの半分以上が海外である会社も一般的になってきました。仕事での海外駐在と海外留学では目的が異なります。

海外留学は「赤字」となります。しかし中長期的視点に立ちますと、10年後、20年後に会社の中核となる人材を育てる最高の社員教育であると、私は考えます。Well-being（ウェルビーイング）が注目されていますように、夢と希望は社員のモチベーションを上げ、貴職場に好循環が生まれるはずで

実社会では、会社間で「競争する場面」だけでなく「協力する場面」があることもご存じであると思います。今回のパリオリンピックでは、日本で人気の野球やソフトボールは落選でした。しかし再びオリンピック種目として選ばれるために、国の垣根を越えて働きかけを行っています。ライバル国が手を結び大きな目標に向かって活動しているのです。そして自国だけでなく次のチャンスに向かって国際的に競技人口を増やす取り組みをしています。必然的に子供に向けての啓発活動が盛んになっています。

日本は少子高齢化が進んでいる成熟した国です。しかし世界には、経済成長と人口増加が進んで消費が拡大している国が多々あります。どの会社でもグローバル展開の重要性が増しているはずで

を持った人が集まらなければ話が進まないことでしょう。「社内の空気を読む力」は大切ですが、「グローバル社会の空気を読む力」を育む人材育成の場も必要です。その場が海外留学です！

しかしながら、会社で「赤字」となる海外留学の費用負担をどうするかという現実があります。ところで、この費用を自社で負担する必要はないのではないのでしょうか？ 各社の自己負担を軽減するために、包装業界として、公官庁に社会人向けの海外留学助成制度の新設を働きかけてもよいと思います。産業の活性化には、それなりの人数を継続して海外に送り出す必要があるため、国として支援する正当な理由になると考えます。産業に関わるすべての会社と国の双方にメリットがあるのではないのでしょうか。会社の枠を超えた業界をあげた「未来への投資」です。この働きかけの母体となりえるのが、非営利学術団体である日本包装学会かもしれません。

7. おわりに

海外とリアルタイムでつながれる今、「なぜ、海外留学なのか？」ということ、私の切り口で語らせていただきました。人は何かの「きっかけ」で動き始める場合もあります。海外留学を考えたことがない方も、本特集号を読んだこの機会に、「あなたの明るい未来！」に向かって海外留学してみませんか？ ちょっとカッコいいですよ！

（原稿受付 2024年8月20日）